



## 祖父と私と保育園

理事 吉田 順



東京オリンピックが終わって、心に残ったオリンピックのことを書こうか、猛威を振るっている新型コロナウイルスについて、いやSDGsに取り組もうとしていることを書こうかとパソコンの前で悩み、書いては消しの時間をかなり費やしました。いろいろと考えた挙句、原点に立ち返り、私の保育の道に進むきっかけについて考えてみました。

私の祖父が保育園を開設していなかったら、今の私はありません。祖父母は共に小学校教員をし、祖母は退職をしたら地域の子ども達のために幼稚園を作り、小さな子ども達と一緒に過ごすことが夢でした。しかし、44歳の若さで亡くなりました。その後、祖父が小学校の定年退職を機に祖母の夢を叶えるために幼稚園の建設を考えましたが、近所に幼稚園があったため諦めて保育園を作りました。私財を投じて小規模保育園から始め、最終的には改築し110名定員の認可保育園にしました。400坪の中に建てられた保育園は祖父の努力の結晶だったと思います。

祖父は90歳まで、身体も頭も衰えることなく園長として勤め、その後は母が園長となりました。しかし、90歳になる祖父の面倒を見ながら園長の業務をこなさなければならない母のことを考えると、それまで保育とは別の仕事をしていた私ですが、いつしか祖父の作った保育園を引き継がないといけないという想いが湧き、自然と保育の道に進むこととなりました。

祖父は明治生まれで、真面目で几帳面な人でした。自分の中のルーティンがあり、必ず実行していました。その一部が、朝、家の窓という窓を季節問わず全て開けて換気をするので、冬は窓全開で寒かった思い出があります。現在、私も毎朝、職員が出勤する前に園の窓を開けて換気をしています。子ども達や職員がインフルエンザ、コロナにかかりませんようにと思いつながら窓を開けています。もしかしたら職員も、冬は寒いのに窓をこんなに開けて、と思っているかもしれません。そして、祖父は日に何度もうがいをするのですが、そのガラガラうがいのご近所に響くほどの音でした。このコロナ禍になってみると、祖父のやっていたことは大事なことだったなとしみじみ思います。

祖父が建てた園舎を立て替えて9年になりますが、建て替えが始まった頃には祖父は108歳でした。その時でも保育園に対する情熱は冷めることはなく、定規を使って新園舎の設計まで考えていました。残念ながら新園舎の完成を待たずに、110歳で他界しましたが、園庭の大きなクヌギの木がこの土地を祖父母が求めた時からの歴史を見守っています。

待機児童対策として新園ができる中、一方では定員割れを起こしている園もあります。今後、祖父が開園して55年近くになる園をどのように存続していくかが今後の課題のひとつです。保育への道に導いてくれた祖父に想いを馳せながら、今後の未来の保育について協会の一員として、微力ではありますが努めて参りたいと思います。